詩集

映画

田口洋子

大宮詩人叢書

田口　洋子（たぐち　ようこ）
• 大宮詩人会会員
• 埼玉詩話会会員
• 水の会　同人
• 著書　詩集「雪渓」

• 現住所　大宮市日進町３－733

田口洋子詩集　**映　画**　〈大宮詩人叢書第３期⑩〉

平成元年11月20日発行

著　者　田口洋子
発行者　宮澤章二
発行所　大宮詩人叢書刊行会
大宮市上小町209　（〒331）　山﨑方
電 話 048-641-2717　振替 東京 2-139230
編集者　山﨑　馨・廣瀧　光
制　作　麗文社　大宮市三橋4-122-3
電 話 048-623-8417
印　刷　中沢印刷株式会社

定価 1,000円

詩　集

映　　画

田口洋子

大宮詩人叢書〈第３期⑩〉

映画 目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新しい朝　8
二月十一日　10
クレイジー　キルト　12
五月の耳　14
雲の中で　16
潮流　18
祭り火　20
一枚の着物　22
岡さんの表札　24
木曽街道奈良井宿　26
八月の川は　28

影 30
北紀行 32
都会 34
日曜日 36
小春日 38
鳩の気分で 40
喪失 42
光が丘からの発信 44
映画 46
あとがき

映

画

新しい朝

黒地に赤い実をぽってりとつけた
南天の重箱
あけぼの色にぼかされた雑煮椀
新しい朝は　こたつの上
箸置きのこまが二つ
ぶつかり合ってまわる

たたらをふみ　横ゆれをはじめたこま
まわれ　まわれ　とまるな

名前ナンテ記号サ

男ノ姓ニ変ッテモ
私ハ　私　ダッタハズ　ガ

一枚の紙きれで　愛をたしかめ
もう一枚の紙きれで
さよなら　を言うことだって出来る

男と女　二人向きあって
何げない顔つきで
卓上に　こまをまわし
互の暗渠を流れる
血の川の音を聞いている

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二月十一日

「マウント　フジ」
「オオ　ビュウティフル」
ニューヨークから来た青年が叫び
フランスなまりの恋人が首をふる
冷たい山中湖の風が　耳をかじる
二月十一日

若い二人の外国人が　私に問いかける
「街の中に　たくさんの旗を見かけました」
「今日は何の記念日？」
「国の誕生日と言うことですが……」
「オオッハッピイー　ハッピイーィッ　バースディ」
富士に向かって　ロック調で青年が歌う

此の国の劇場では　神話劇が続演(ロングラン)中で
も頭痛持ちの演出家が何人もいて勝手
に台本を書き替えるので　役者も観客
も喧喧囂囂　知らぬまに緞帳がおりて
皆追い出され　お気に召すまま　召さ
ぬまま　演目に　こだわっている

ソプラノの声が尋ねる
「この湖は　ソルトレイク」
「ノン」
ソドムとゴモラの
塩の柱の幻影が　背中をよぎり
私は蟹のように歩きながら
「わたしにも　よく　わからないのよねっ」　と
富士に話しかけている

クレイジーキルト

開いたドアの向こうに　広がる海
はさみをふりたてて蟹の行列が
おきなえびす貝の城に　かけこんでゆく

キルトの壁かけの中
女が男のために編むセーターを
はじからほどいてゆく　船に乗った男

別れのテープなのか

足枷の鎖なのか
一針の涙が　女のほほに白い

集められ　はぎ合わされた
日常の些事が
色布の中ではねる

クレイジーキルトの
男と女
視線をそらせた　それぞれの位置で
合わせ鏡の部屋の中
連なる顔をのぞいている

五月の耳

武尊の頂に立ち
ふり返る
両耳を雪にうめて　谷川岳が
五月の空にまぶしい

ふと　思いついて
いろいろな耳を数えてみる

ろばの耳
福助耳
地獄耳
針のみみに　パンのみみ

私の中で　歴史の耳は
深い穴を穿って
アンモナイトの渦につながる

ああ　あの山は
山男達の悲鳴を
なだれのように
耳朶の奥にのみこみ
そ知らぬ顔で
上州の空をくぎる

私は　こっそりと
桜の咲く里の　こいのぼりを
「肩の小屋」あたりの空に　泳がせ
赤い布の道しるべが続く
雪の谷をくだる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com